

令和 6 年 6 月 24 日現在

機関番号：25406

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2019～2022

課題番号：19H01393

研究課題名(和文) 日本植民地期遺産をめぐる歴史認識の文化人類学的研究 - 建築物のライフヒストリーから

研究課題名(英文) Anthropological study of local perception on colonial architecture heritage from Japanese imperial era

研究代表者

上水流 久彦 (KAMIZURU, Hisahiko)

県立広島大学・公立大学の部局等(広島キャンパス)・教授

研究者番号：50364104

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 13,300,000円

研究成果の概要(和文)：植民地期の建築物が日本の旧植民地で遺産となるかは、当時日本が何をしたかよりも、各国の戦後直後の政治状況や日本との戦後の政治的経済的関係、当該社会の民主化によって左右されていた。また、消費文化の浸透、観光産業の発展、地域ブランド化の必要性も影響していた。一方で、費用対効果の点から遺産の活用が重視され、台湾、韓国、中国では、カフェやレストラン、または観光地として活用されている。しかし、娯楽性を高めるための魅力向上は負の記憶の継承を危うくする側面を強く持っていた。遺産化には、建築学的価値や歴史的価値等の意義も重要だが、モノとしての人間の感情への働きかけも重要であり、情動理論も考慮する必要がある。

研究成果の学術的意義や社会的意義

台湾、韓国、中国、パラオ、サハリン、沖縄等の対日感情が如何に形成されているかを植民地統治期の建築物の遺産化の過程や現状を通じて類型化し、その差異の要因を明らかにした。当時何をしたか以上に、戦後の日本との政治的経済的関係、戦後直後の統治者と現地社会の関係、民主化の進展による社会の多元化の浸透が重要な要素であった。同時に遺産となった建築物は、一部の国で、現在、観光資源として活用されていた。だが、娯楽性の向上は植民地統治の記憶の継承を曖昧にする側面があった。遺産の消費文化の対象化には、費用対効果の発想があるが、それは遺産化した自体の価値を喪失させており、遺産のあり方に多大な影響を及ぼしていた。

研究成果の概要(英文)：Architectural and historical value are important factors in the heritagization of Japanese colonial-period buildings. However, the critical factors are each country's political situation and postwar political and economic relations with Japan. In recent years, many administrative agencies in Taiwan and South Korea have placed emphasis on cost-effectiveness and promoted the utilization of heritages for commercial purposes. Consequently, many heritages in these countries have been used as cafes and so on. For using heritages as leisure facilities, the establishment of consumer culture, the development of the tourism industry, and the need for regional branding are necessary. On the other hand, improving attractiveness to be chosen by consumers as leisure ones has been an obstacle to passing on memories of Colonial rule. Another crucial aspect in the heritagization of colonial period buildings is the emotional appeal of their materials and atmospheres. To understand this, we must employ affect theory.

研究分野：文化人類学

キーワード：植民地主義 大日本帝国 遺産 記憶の継承 モノのエージェンシー 情動 観光資源

## 様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

植民主義研究の重要な目的は、植民地統治を受けた人々の立場からその歴史を問い、その経済的・文化的・社会的影響について検討する点にある。一方で、欧米の植民地統治と異なり、敗戦によって多くの旧植民地を一拳に失い、敗戦から70年以上たつ日本の植民地統治研究では、脱植民地化が重要なテーマとなり、「日本体験世代から日本が歴史化する世代への交代といった時間の流れ」のなかで今後の歴史認識や日本認識にいかなる影響を与えるのかが、新たな研究課題となっていた。その焦点のひとつが記憶の継承であり、植民地統治の残滓のなかでも遺産化（遺産認定または保存・活用）をめぐる、議論のある建築物（政庁の他、産業施設も含む）にその動向が顕著である。例えば、1990年頃から中国では旧満州国の建築物保存が行われ、重要な記憶装置となっている。また同時期頃から台湾、韓国、旧樺太（サハリン）でも植民地建築物が遺産化され、植民地統治の負の遺産として、歴史を学ぶ生きた教材として、また観光対象としても活用されてきた。しかし、2010年頃から台湾や韓国では余暇活動や観光の普遍化のなかで、遺産の一部がカフェやレストランになり、植民地統治の残滓という歴史が忘却され、「おしゃれ」で「モダン」なモノとして現地の人々や外国人観光客が楽しむ消費文化となってきた。植民地建築物は、負の歴史記憶の継承という認定側の当初の意図を超えて、近年では郷愁を誘う雰囲気のあるモダンな建物として人々を引き付けてもいた。

### 2. 研究の目的

上記の状況を背景に本研究では、日本統治経験者が当該社会で僅かとなる世代交代の時間に焦点をあて、植民地建築物がいかなる社会的・文化的脈絡において、負の歴史記憶の継承の役割を担われ、現在ではその一部が記憶の忘却を通じて歴史認識とは無縁の消費文化になったのかを検討していくことを目的とした。

具体的には以下の3点である。対日感情や歴史認識の転換点である植民地建築物の「遺産化の認定の許容」が生み出される社会的・文化的脈絡（日本敗戦後の旧植民地の政治状況、国際関係、経済発展、対日関係等）を明らかにする、遺産化・消費文化化の過程に力点を置いて、モノと人々の関わりを民族誌的観点から分析する。モノと人の関わりについて日本の旧植民地間の異同を把握し、比較する。

### 3. 研究の方法

文化人類学を専門とする研究者7名で調査研究体制を構築した。各研究者の対象地域は、中国東北部、台湾、韓国、サハリン、パラオ、日本（主に炭鉱関連）である。さらに研究協力者として台湾、韓国、中国等の研究者を加え、国内からは建築学や遺産認定の法律に詳しい専門家にも参画してもらった。なお、国外の状況を把握するため、近代日本に組み込まれた北海道や沖縄も含め国内でも現地調査を実施した。

このような体制のもと、以下の研究手法をとった。

#### (1) 建築物の遺産化と人々のまなざしをめぐる現状の把握

現存する建築物は遺産化されたもの、そうでないもの、また放置されたもの、さらにはカフェ等になっているものがある。この現状を地域ごとに把握した。

遺産化された建築物に対して人々は植民地統治の想起や忘却を通じて異なった感情を持つ。この多面的な感情を地域ごとに理解した。

遺産化をめぐる多様な状況や人々複雑なまなざしを把握することで、認定や保護推進派の狙いと利用・消費する者とのズレの理解をモノのエージェンシーの視点も含め明確にした。

#### (2) 遺産化と消費文化の対象となる過程の把握

日本国内を除くいずれの調査地では、概ね1990年代以降、遺産化が始まっており、当時の関係者へ聞き取りを行った。その対象は、制度設計した人物、認定委員会の委員、その展示を行う関係者、カフェ等の経営者である。加えて、遺産化や消費文化化を容認する背景として、旧植民地と日本の関係、政治的経済的状況、国際関係等に注目し、史資料や関係者のインタビューから社会的・文化的脈絡を明らかにした。

#### (3) 各旧植民地間の差異化の要因の提示

この調査結果を比較することを通じて旧植民地間の建築物に関わる状況の異同を把握し、差異化を生む主たる要因を明らかにした。

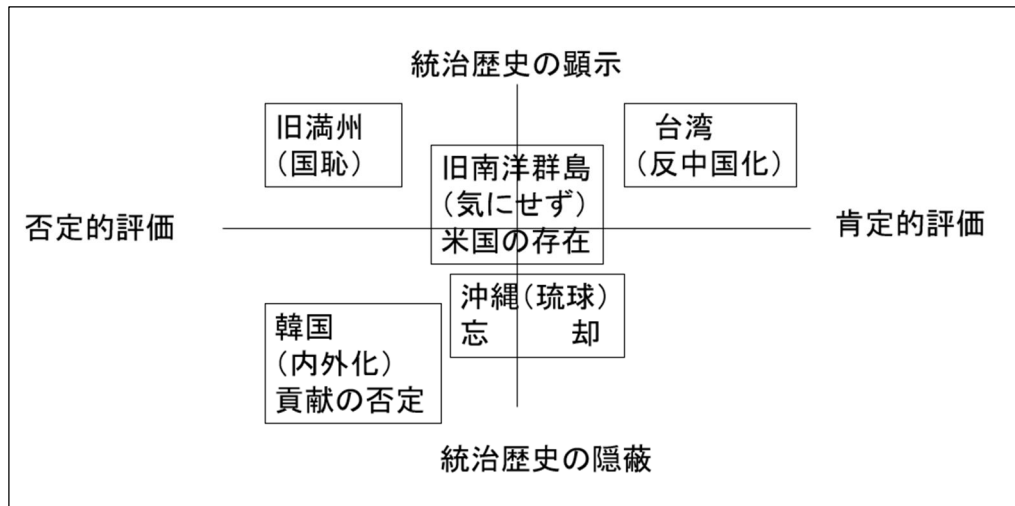
### 4. 研究成果

#### (1) 植民地期の建築物の現状に関する分類の精緻化

支配者の遺産であるが故に単に破壊・放置される「外部化 externalisation」、日本出

自ごと自らの歴史に組み込むが、近代化を阻害したとし、否定する側面を前面に出「内外化 negative internalisation」、逆に戦後の支配者との対比のもとで肯定的にとらえる「内部化 positive internalisation」、日本統治という歴史性が忘却され、日常生活のなかで建築物の持つ「モダンさ」や「美しさ」が消費される「溶解化 de-Japanisation」という概念で整理していたが、加えて、建築物の日本出自に基づいて建築物の歴史性が消費文化の浸透のもと消費される対象とされる「遊具化 utilization of Japaneseness」を加え、現状分析の枠組みの精緻化を行った。

- (2) 調査対象地域における遺産を通じた日本認識の分類  
以下の図表のようにまとめた。



- (3) 遺産認定をうける過程の明確化

日本統治期の建築物の遺産化において各国での建築物に関する重要文化財などの遺産化の制度化が前提である（本研究の対象国家のみならず世界的に制度が確立される潮流があった）が、実際の初期の認定においては、建築学的価値を十分に有しているかは大きな要素であった。歴史的価値には、過去を対象化する認識の広がりのもと、三つの考え方があった。ひとつ目は、日本に対する勝利の証としての意義である。典型的な事例はサハリンや中国東北部である。ふたつ目は、日本の植民地統治の暴力性を示すモノとしての意義である。典型例が中国東北部や韓国である。台湾や沖縄でも一部見られる。三つ目は、近代化の証である。台湾がその典型で、沖縄でも一部見られる。

このような3つの歴史的価値は日本敗戦後の統治のあり方が大きく影響していた。パラオや台湾では、アメリカや中国国民党の統治のもとで日本の統治を比較する視点が住民のなかで醸成され、国家の歴史観とは別の歴史観が根付く要素となった。上記の3点目の歴史的価値が生まれる要素となった。加えて、民主化は歴史認識の多元化を醸成することとなり、国家単位のみならず、ごく狭い地域や個人の認識から見た歴史認識の発動、国家の歴史認識を相対化する試みが広がり、日本統治期の建築物の歴史的価値もそのような中で見直しがなされた。その典型例が台湾である。韓国も民主化によって、市民レベルでは遺産の活用の幅が広がったが、正式な遺産の説明では、収奪など日本の植民地統治の負の部分強調されることに変化はなかった。

- (4) 日本統治期の建築物の遺産化における今後の課題の指摘

#### 負の記憶の継承と遺産の消費文化化の葛藤

近年は各国で観光産業が発達し、消費文化も浸透するようになった。そのような変化のもと遺産を経済と結びつけることが推奨されるようになり、遺産となった日本統治期の建築物が観光スポットやカフェやレストラン、独立系書店などになった。その傾向が台湾や韓国、沖縄、北海道では良く見られ、中国でも観光スポットになっている。加えて、行政は費用対効果を重視するようになり、遺産化された建築物の運営を民間に委託することで遺産を維持する費用の低コスト化を進めている。結果、遺産の消費文化化（消費文化の対象となること）が台湾や韓国、北海道や沖縄を含む日本で急速に進んでいる。

このことは、植民地統治という負の記憶を継承する点で大きな葛藤を現場で発生させている。暴力性を伝えるメッセージが弱くなり、娯楽的要素が強く前面に出るためである。観光スポットとするため日本から神を勧請した旧神社が台湾にあるが、そのことには大きな批判が出て、神は旧神社から遷移された。費用対効果の視点から遺産の消費文化化は今後も浸透すると思われ、遺産の持つ意義（記憶の継承）との葛藤が今後の重要な課題となる。

## 遺産化・消費文化化の分析における情動理論の導入

日本統治期の建築物の遺産化・消費文化化では、建築学的意義や歴史的意義、さらに対象社会における民主化や多元化、行政の費用対効果の重視、観光産業の確立や消費社会の浸透という点から分析を行った。市民が遺産に足を運ぶかという点において、建築学的・歴史的意義や遺産の娯楽性だけでは十分に説明できない。それらの意義や娯楽性とは関係なく、建築物が持つ雰囲気(荘厳さ、スケールの大きさ、気味の悪さなど)が市民を引きつける要素になっているためである。すなわち、建築物の人間への感情・情動への働きかけが、遺産の維持(市民が足を運ぶという点で)に重要である。今後は、遺産化・消費文化化の分析において情動理論を導入し、分析することが不可欠である。

## 脱植民地化研究における shared heritage の適用

植民地期の建築物を旧植民地が自国の遺産として旧宗主国と連携して活用していくという shared heritage の考えがインドネシア等を対象とした研究で指摘されている。現時点で、旧植民地の植民地遺産に日本政府が直接的に働きかけすることはないが、多くの日本人がカフェ等になった植民地遺産を台湾や韓国では訪れている。すなわち、植民地遺産の選別(市民が足を運び、遺産が維持されるか否か)に旧宗主国の日本の観光客も大きく関与している。日本の観光客は消費文化の一部となった植民地遺産をどのように認識し、現地の人々はそれを如何にとらえているのか。両者の認識の異同を探ることで、植民地経験の共有がなされているのか、そのような出会いが彼らにもたらすものは何なのか、これらを分析する枠組みとして shared heritage を適用し、脱植民地化を検討することが今後の課題となる。

## 参考文献

- Kamizuru Hisahiko, 2021, Significance of Heritage in Decolonisation: Taiwanese Colonial Experiences and their Appropriation of Japan's Imperial-Era Buildings. In Mio Yuko(ed.) *Memories of the Japanese Empire: Comparison of the Colonial and Decolonisation Experiences in Taiwan and Nan'yo-gunto*. pp.137-159. Routledge
- 上水流久彦編 2022 『大日本帝国期の建築物が語る近代史: 過去・現在・未来 (アジア遊学 266)』 勉誠出版
- 木村至聖 2014 『産業遺産の記憶と表象 「軍艦島」をめぐるポリティクス』 京都大学学術出版会
- 문예은, 2011, 「근대문화유산을 둘러싼 담론의 경쟁 양상 분석 - 군산시를 중심으로 - 」 『지방사와 지방문화』 14-2 : 265-304.
- T・D・Hasti, 2020, Heritage Conservation in Indonesia 『金沢大学文化資源学研究』 24

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計19件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 2件 / うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 Paichadze S. S. Krasilnikova E. I.	4. 巻 7-2
2. 論文標題 The Russian necropolis in Japan: problems and prospects for studying	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Omsk Scientific Bulletin. Series Society. History. Modernity	6. 最初と最後の頁 18 ~ 25
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.25206/2542-0488-2022-7-2-18-25	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 藤野陽平、パイチャゼ・スヴェトラナ	4. 巻 266
2. 論文標題 帝国が残した国立博物館と戦後の社会	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 アジア遊学	6. 最初と最後の頁 54-66
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 藤野陽平	4. 巻 266
2. 論文標題 開拓と宣教のせめぎ合い 北海道のキリスト教建築にみるまなざしのポリティクス	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 アジア遊学	6. 最初と最後の頁 80-92
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 藤野陽平・芳賀恵	4. 巻 266
2. 論文標題 監獄博物館とノスタルジア ダークツーリズムを暗くするもの、明るくするもの	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 アジア遊学	6. 最初と最後の頁 120-131
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 永吉守	4. 巻 266
2. 論文標題 市庁舎は誰のもの？：国登録有形文化財・大牟田市庁舎をめぐる事例より	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 アジア遊学	6. 最初と最後の頁 193-204
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中村八重	4. 巻 266
2. 論文標題 「日本」と「近代」を観光化すること - 韓国・九龍浦の事例から	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 アジア遊学	6. 最初と最後の頁 144-153
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 飯高伸五	4. 巻 266
2. 論文標題 帝国医療の想起と忘却 旧南洋群島の病院建築物から	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 アジア遊学	6. 最初と最後の頁 154-167
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 上水流久彦	4. 巻 266
2. 論文標題 序言 大日本帝国の建築物が語る近代史 - 過去・現在・未来	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 アジア遊学	6. 最初と最後の頁 4-7
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 上水流久彦	4. 巻 266
2. 論文標題 沖縄の近代の語られ方 沖縄戦で消えた建築物	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 アジア遊学	6. 最初と最後の頁 205-216
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 上水流久彦	4. 巻 266
2. 論文標題 紅樓の現在 台湾社会の写し鏡の場としての歴史遺産	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 アジア遊学	6. 最初と最後の頁 132-143
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 上水流久彦	4. 巻 266
2. 論文標題 旧植民地の建築物の現在 多元的価値観の表象	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 アジア遊学	6. 最初と最後の頁 41-53
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 上水流久彦	4. 巻 1
2. 論文標題 帝国期遺産をまなざす「われわれ」の特殊性	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 東アジア研究	6. 最初と最後の頁 57-75
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 飯高伸五	4. 巻 173
2. 論文標題 パラオにおける伝統の再編と日本統治の記憶	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 季刊 民族学	6. 最初と最後の頁 48-56
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 飯高伸五	4. 巻 88-3
2. 論文標題 1974年と2004年、パラオの伝統政治と近代政治 - 山本真鳥の研究を手がかりに	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 経済志林	6. 最初と最後の頁 263-285
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 中村八重	4. 巻 46
2. 論文標題 The Kirin Lion Dance Bringing Pace and Happiness	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 ICH Courier volume	6. 最初と最後の頁 14-15
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 中村八重	4. 巻 38
2. 論文標題 ノスタルジアの観光化 近代建築物を中心に - (韓国語)	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 実践民俗学研究	6. 最初と最後の頁 9-33
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -



1. 著者名 上水流久彦	4. 巻 創刊号
2. 論文標題 日本統治時代の建物の現在	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 K	6. 最初と最後の頁 28-31
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松田良孝・上水流久彦	4. 巻 創刊号
2. 論文標題 観光にみる沖縄と台湾の結ばれ方	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 K	6. 最初と最後の頁 24-26
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 楊小平	4. 巻 50-2
2. 論文標題 中国における核被害者補償措置 軍人恩給福祉を中心に	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 環境と公害	6. 最初と最後の頁 20-25
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計23件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 5件）

1. 発表者名 上水流久彦
2. 発表標題 大日本帝国期の建築物の現在から見る歴史認識～沖縄と台湾を事例に
3. 学会等名 鹿児島大学国際島嶼教育研究センター第236回研究会
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 上水流久彦
2. 発表標題 日本統治期の建築物の現在 台湾を事例に
3. 学会等名 2021 年世新「日本學」國際學術研討會（招待講演）（國際学会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 永吉守
2. 発表標題 市庁舎は誰のもの？：国登録有形文化財・大牟田市庁舎をめぐる事例より
3. 学会等名 日本文化人類学会第55回研究大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 永吉守
2. 発表標題 文化財市庁舎をめぐる「縁故者」の力 - 大牟田市庁舎の事例より -
3. 学会等名 久留米大学比較文化研究所発表
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 上水流久彦
2. 発表標題 台湾における日本統治時代の古蹟活用の現在
3. 学会等名 「生きる文化遺産」研究会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 永吉守
2. 発表標題 文化遺産としての行政建築をめぐる社会・文化的価値 - 大牟田市庁舎の事例より -
3. 学会等名 久留米大学比較文化研究所研究報告会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 中村八重
2. 発表標題 郷愁の観光化：近代建築物を中心に
3. 学会等名 第43回実践民俗学会全国大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 藤野陽平
2. 発表標題 開拓と宣教のせめぎ合い 北海道のキリスト教建築にみる比較研究
3. 学会等名 仙人の会7月例会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 上水流久彦
2. 発表標題 植民地期の建築物の現在～台湾を事例に
3. 学会等名 仙人の会7月例会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 中村八重
2. 発表標題 交錯する近代建築物の観光 韓国の事例から
3. 学会等名 仙人の会7月例会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 楊小平
2. 発表標題 中国における帝国日本建築物のいま-大連旅順の都市物語り
3. 学会等名 仙人の会7月例会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 飯高伸五
2. 発表標題 近代医療の記憶と文化施設転用 旧南洋群島の病院建築物
3. 学会等名 仙人の会7月例会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 中村八重
2. 発表標題 レトロブームの中の近代建築物 - 韓国の植民地遺産に関する一考察 -
3. 学会等名 日本文化人類学会第54回研究大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 中村八重
2. 発表標題 ノスタルジアの観光化 - 近代建築物を中心に -
3. 学会等名 韓国実践民俗学会第43次全国学術大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 藤野陽平
2. 発表標題 ボーダーから遠ざかりボーダーを意識する 台湾の国家人権博物館白色恐怖緑島記念園區の事例から
3. 学会等名 北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院メディア・ツーリズム研究センター主催シンポジウム「国境と観光：国境地域に学ぶ」
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 藤野陽平
2. 発表標題 民俗宗教としてみる台湾の日本神」
3. 学会等名 北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院「メディアと東アジア」研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 藤野陽平
2. 発表標題 From a cursing ghost to a god of friendship between Japan and Taiwan: The construction of gaze to Japanese spirits in Taiwan
3. 学会等名 the 2nd Annual Conference of the EASSSR 2019, East Asian Society for the Scientific Study of Religion (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 藤野陽平
2. 発表標題 すれ違う台湾の日本神へのまなざしと実践
3. 学会等名 第34回慶応義塾大学東アジア研究所学術大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 楊小平
2. 発表標題 中国にみる核実験被害援護措置
3. 学会等名 「核実験被害援護措置の掘り起こしと国際比較研究」Zoom公開研究会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Paichadze Svetlana
2. 発表標題 Russian-speaking migrants in Japan in 1950s-1970s: identity and issues to adaptation into Japanese society
3. 学会等名 World Congress in Real and Virtual Mode East-West: The Intersection of Culture (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 上水流久彦
2. 発表標題 八重山・対馬にみる 境域 研究の課題
3. 学会等名 国際日本文化研究センター第54回 国際研究集会「帝国のはざまを生きる - 交錯する国境、人の移動、アイデンティティ」(国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Paichadze Svetlana, Fujino Yohei
2. 発表標題 Representation of history in state museums, collective memory and historical trauma
3. 学会等名 III International scientific conference LESSONS OF THE SECOND WORLD WAR AND MODERNITY (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 飯高伸五
2. 発表標題 フィールドからみた科学史研究
3. 学会等名 坂野徹『島 の科学者 - パラオ熱帯生物研究所と帝国日本の南洋研究』合評会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計15件

1. 著者名 藤野陽平他	4. 発行年 2023年
2. 出版社 古今書院	5. 総ページ数 138
3. 書名 フィールドから地球を学ぶ	

1. 著者名 上水流久彦・藤野陽平他	4. 発行年 2022年
2. 出版社 台北駐日経済文化代表処台湾文化センター	5. 総ページ数 175
3. 書名 台湾書旅 台湾を知るためのブックガイド A Book Guide to Taiwan	

1. 著者名 上水流久彦編著	4. 発行年 2022年
2. 出版社 勉誠出版	5. 総ページ数 248
3. 書名 大日本帝国期の建築物が語る近代史	

1. 著者名 飯高伸五他	4. 発行年 2021年
2. 出版社 昭和堂	5. 総ページ数 280
3. 書名 日本で学ぶ文化人類学	

1. 著者名 Paichadze Svetlana	4. 発行年 2022年
2. 出版社 Springer	5. 総ページ数 145
3. 書名 Identity, Language and Education of Sakhalin Japanese and Koreans	

1. 著者名 Kamizuru Hisahiko etc	4. 発行年 2021年
2. 出版社 Routledge	5. 総ページ数 220
3. 書名 Memories of the Japanese Empire	



1. 著者名 上水流久彦他	4. 発行年 2022年
2. 出版社 みずき書林	5. 総ページ数 728
3. 書名 帝国のはざまを生きる	

1. 著者名 福永由佳、庄司博史	4. 発行年 2021年
2. 出版社 三元社	5. 総ページ数 238
3. 書名 顕在化する多言語社会日本	

1. 著者名 岡井崇之、上水流久彦他著	4. 発行年 2019年
2. 出版社 晃洋書房	5. 総ページ数 244
3. 書名 アーバンカルチャーズ 誘惑する都市文化，記憶する都市文化	

1. 著者名 櫻井 義秀、藤野陽平他著	4. 発行年 2020年
2. 出版社 北海道大学出版会	5. 総ページ数 350
3. 書名 アジアの公共宗教	

1. 著者名 和崎春日、藤野陽平他著	4. 発行年 2020年
2. 出版社 刀水書房	5. 総ページ数 830
3. 書名 響きあうフィールド，躍動する世界	

1. 著者名 Akihiro Ogawa、Paichadze Svetlana他著	4. 発行年 2020年
2. 出版社 Routledge	5. 総ページ数 258
3. 書名 New Frontiers in Japanese Studies	

1. 著者名 石森大知、飯高伸五他著	4. 発行年 2019年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 368
3. 書名 太平洋諸島の歴史を知るための60章	

1. 著者名 植野弘子、上水流久彦他著	4. 発行年 2020年
2. 出版社 風響社	5. 総ページ数 276
3. 書名 帝国日本における越境・断絶・残像 人の移動	

1. 著者名 植野弘子、上水流久彦他著	4. 発行年 2020年
2. 出版社 風響社	5. 総ページ数 316
3. 書名 帝国日本における越境・断絶・残像 モノの移動	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<a href="https://www.pu-hiroshima.ac.jp/p/kamizuru/studyroom.html">https://www.pu-hiroshima.ac.jp/p/kamizuru/studyroom.html</a> 上水流久彦研究室
---

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	中村 八重  (Nakamura Yae)  (00769440)	東亜大学・人間科学部・客員研究員   (35503)	
研究分担者	パイチャゼ スヴェトラナ  (Paichadz Svetlana)  (10552664)	北海道大学・メディア・コミュニケーション研究院・准教授   (10101)	
研究分担者	飯高 伸五  (Iitaka Shingo)  (10612567)	高知県立大学・文化学部・准教授   (26401)	

## 6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	永吉 守 (Nagayoshi Mamoru)  (20590566)	久留米大学・付置研究所・研究員  (37104)	
研究分担者	楊 小平 (Yo Shohei)  (30736260)	東亜大学・人間科学部・客員研究員  (35503)	
研究分担者	藤野 陽平 (Fujino Yohei)  (50513264)	北海道大学・メディア・コミュニケーション研究院・准教授  (10101)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	林 楽青 (Lin leqing)		
研究協力者	林 承緯 (Lin Chengwei)		
研究協力者	オ セミナ (o semia)		
研究協力者	宮畑 加奈子 (Miyahata Kanako)		

## 7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
中国	大連理工大学			
その他の国・地域	国立台北芸術大学			
韓国	全北大学校	韓国外語大学校		